

# 陳寅恪論及敦煌文獻雜記

——利用經路を中心に\*

永田知之

## 一、はじめに

陳寅恪（1890～1969）、江西義寧の人、長沙で出生、のち南昌・南京で育つ。弱年で歐米等へ留學、民國十五年（1926）に招かれて清華國學研究院の導師に着任、數々の論著を世に問う<sup>1</sup>。二〇世紀中國を代表する史家として、その絶大な影響力は今さらいうまでも無い。

透徹した史眼と並び、陳寅恪の學問を支えたのは、超人的な博學多識であった。著述における新資料の博搜は、その最も顯著な表れだろう。魏晉南北朝隋唐史を主な對象とする彼の前期の研究にあって、この所謂「新資料」の中でも、敦煌文獻は大きな位置を占める。

「敦煌學」の語を最も早く意識的に用いたのが、陳寅恪だということは、今日では定論だろうし、これは本人も自負していた<sup>2</sup>。彼と敦煌學の關係を扱う論著も既に複數存在する<sup>3</sup>。一々斷らないが、後文の中でもそれらの成果を大いに参照した點を、まず明記しておく。ただ、先行研究の主要な關心は、共に陳寅恪の「敦煌學」が持つ學術的意義に集中している。

眼疾治療を目的とした短期のロンドン滞在（1945～1946）を除けば、中年期以降は一度も歐州に渡航していない陳寅恪は、當然だが本格的な研究開始の後、英

\*本稿は日本學術振興會科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究B、研究代表者：高田時雄京都大學人文科學研究所教授）による研究成果の一部である。

<sup>1</sup>陳寅恪の事跡は卞僧慧（2010）に據る。

<sup>2</sup>周一良（1998）440頁、池田温（2003）62-63頁参照。また、陳寅恪「大千臨摹敦煌壁畫之所感」に「寅恪昔年序陳援庵先生敦煌劫餘錄、首創「敦煌學」之名」とある。陳寅恪（2002）446頁、初出1944年。「大千」は畫家の張大千を指す。

<sup>3</sup>姜伯勤（1988）、陸慶夫・齊陳駿（1989）、趙和平（2002）、李玉梅（1997）224-245頁、張求會（2005）。

佛所在の敦煌文獻を目撃し得なかった。もとより、敦煌學の草創期、これは非西歐の研究者が抱えた共通の困難だ。だが、かかる状況下で彼がどう研究を進めたかには、存外関心が拂われていない。先行研究に導かれつつ、それを明らかにする一敢えて本稿を草した所以である。

なお、敦煌文獻中の非漢文史料や、吐魯番出土文書に對しても、陳寅恪の造詣は甚だ深かった。筆者の力不足に因り、小論ではそれらに言及できぬ點を、豫め申し添えておく。

## 二、陳寅恪の「敦煌學」事始

敦煌資料の存在や意義を、陳寅恪がいつ認識し始めたかは詳らかでない。彼の父、即ち清末・民國屈指の古典詩人陳三立（1853～1937）は敦煌文獻を藏していたともいう<sup>4</sup>。ただ、敦煌資料の將來者ペリオ（Paul Pelliot、伯希和、1878～1945）との交流は見落とせまい。

陳寅恪とペリオの交流は前者のパリ留學中に、王國維（1877～1927）の紹介で面會した時に始まる。のち1930年代前半に後者は北京を二度訪れ、この際も前者との交渉が存した。浦江清（1904～1957）が渡佛する際、「巴黎圖書館等處」に藏せられる「漢文珍貴材料可供研究者」利用の便宜を圖るよう請う紹介狀（「致伯希和」、1933年）を持たせたのも、陳寅恪だ<sup>5</sup>。

そもそも、陳寅恪の最も早い學術論文は敦煌佛典の校本に寄せた「大乘稻芊經隨聽疏跋」（1927）だった。その中で、彼はペリオが吐蕃の佛僧・法成を扱った論文を擧げる<sup>6</sup>。

多數の言語を能くした陳寅恪の學問が、歐米の東洋學に影響を受けていた事實は、よく知られる。「敦煌學」も、例外ではなかったというわけだ。今一つ、例を擧げよう。

「桃花源記旁證」の中で、陳寅恪は「倫敦博物館藏敦煌寫本斯坦因號玖貳貳西涼建初十二年敦煌縣戶籍」を引用する<sup>7</sup>。現在、當該の寫本には S.113 の番號が與えられている。

實は、この「玖貳貳」は敦煌資料へ最初に附された location number だ<sup>8</sup>。library

<sup>4</sup>2005年の秋、北京翰海の拍賣に「陳印三立」という印文の藏印が見える敦煌文獻が出陳された。陳紅彥・林世田（2007）34頁。ただし、文獻自體や藏印の眞贋は定かではない。

<sup>5</sup>陳寅恪（2001d）169頁。桑兵（1997）、王川（2004）參照。浦は清華大での陳の元助教。

<sup>6</sup>陳寅恪（2001f）所收。經題の「芊」（初出以來同じ）は「芊」の誤りか。同文は江杜（味農）が京師圖書館や傅增湘の藏本を用いた研究への跋で、Paul Pelliot（1914）を引證する。

<sup>7</sup>「桃花源記傍證」は1936年初出、陳寅恪（2001e）191頁。

<sup>8</sup>英藏敦煌文獻（1990）51頁上段の圖版左下隅に「ch.922.」という書き込みが見える。

number 確立前の英語論文から、陳寅恪は同寫本の情報を得ており、本人が別にそれを明言する<sup>9</sup>。情報の入手経路を顧慮せず、「玖貳貳」を誤りと断じる研究<sup>10</sup>は、粗忽の謗りを免れまい。

さて、現存する陳寅恪の全論著から、敦煌資料に関する言及は、数十件を見出し得る。これは未定稿も対象に、専論は一つと数えながら、瑣末なものまで含めた延べ数だ。

重複（札記に蓄積された情報が論文に結實し、後に專著へ吸収された例など）を除けば、使用される文献の点数はそう多くない。以下、六節に分けて、その利用の諸相を概観する。

### 三、中國人の先行業績

まず當然だが、中國での先行研究から、ある敦煌文献やその圖版・録文の情報を得た例が考えられる。次にそれらを列記するが、文献名は總じて陳寅恪自身が用いた呼稱に従う。

「：」の後が陳寅恪の言及する敦煌文献、同じく前はその典據と思しき研究書だ。彼がそこから情報を入手したと明記する場合は、寫本名を太字にしてある。取得源が複数考え得る時は、その中で最も古い研究を挙げた（「秦婦吟」の寫本については、第八節参照）。

王仁俊輯『敦煌石室眞蹟録』甲上（國粹學堂石印本、1909年）：P.4503「柳公權書金剛經」<sup>11</sup>

羅振玉輯『鳴沙石室佚書』（上虞羅氏景印本、1913年）：『太公家教』<sup>12</sup>

葉德輝輯『雙楫景閣叢書』（長沙葉氏邨園刊本、1914年）：P.2539「男女陰陽交歡大樂賦」<sup>13</sup>

羅振玉輯『敦煌零拾』（上虞羅氏排印本、1924年）：臺北中央研究院歷史語言研究所傅斯年圖書館「須達起精舍因緣曲」、「維摩詰經文殊師利問疾品演義」、上海圖書館 028V (812406) 「有相夫人生天因緣曲」<sup>14</sup>、臺東區立書道博物

<sup>9</sup> 『讀書札記・沙州文錄補遺附錄之部之部』、陳寅恪（2001h）292-293頁。陳寅恪が依據する英語論文は Lionel Giles（1915）、その 469-470 頁に S.113（ch.922.）の録文が見える。『讀書札記』（以下、『札記』）は多年に渉る筆記で、視力低下前という他、箇々の執筆時期は不詳。

<sup>10</sup> 張弘・伊波（1994）、同（1995）。「誤り」という指摘は、前者の 70 頁に見える。

<sup>11</sup> 『札記・新唐書之部』、陳寅恪（2001g）549頁。

<sup>12</sup> 「薊丘之植植於汶篁之最簡易解釋」（1931）、陳寅恪（2001f）297頁、張求會（2004）参照。

<sup>13</sup> 『札記・唐人小説之部』、陳寅恪（2001h）235頁。『同・新唐書之部』、同（2001g）500頁に「託名（白）行簡之文甚多」とあるのも、白行簡作というこの賦を意識したのか。

<sup>14</sup> 「有相夫人生天因緣曲跋」（1927）、「須達起精舍因緣曲跋」（1928）、「敦煌本維摩詰經文殊師利

館【139】『勾道興搜神記』<sup>15</sup>

羅福長輯『沙州文錄補』（上虞羅氏排印本、1924年）：S.6502『大雲（無想）經疏（殘本）』（王國維跋<sup>16</sup>）、P.2822V「先天二年殘戶籍」、P.3898V「敦煌懸泉鄉殘戶籍」<sup>17</sup>

劉復輯『燉煌掇瑣』（國立中央研究院歷史語言研究所、1930年）上輯：P.2962「西征記」<sup>18</sup>、P.2553「昭君出塞變文」<sup>19</sup>、同中輯：P.3348Va「天寶四載豆盧軍和羅（計）帳（殘本）」<sup>20</sup>

名稱の前に記した所藏機関・編號は舊藏者などと異なる場合がある。觸れられた文獻は多岐に渉る。強いていえば、變文（曲、佛曲、演義）への言及が、多くを占めるようだ。

敦煌所出佛曲變文、其體裁與後小説關係甚巨。陳寅恪先生於佛教及中國文學研究極深、所見敦煌祕藏尤多、故該系特設此科、以討論最新之中國文學史料。（北京清華檔案「中國文學系紀事・大事紀」<sup>21</sup>、1929年の清華大學中國文學系の開講案内）

世之考高昌之壁畫、釋敦煌之變文者、往往取之以爲證釋、而天竺話經之法、與此土大異、於此亦可見一例也。（「楊樹達論語疏證序」〔1940〕。「取之」の「之」は『賢愚經』）

拙文<sup>22</sup>所以得如斯之結論者、因見近年所發現唐代小説、如敦煌之俗文學、及日本遺存之遊仙窟等、與洛陽出土之唐代非士族之墓誌等、其著者大致非當時高才文士、（張文成例外。）而其所用以著述之文體、駢文固已腐化、即散文亦極端公式化、實不勝敘寫表達人情物態世法人事之職任。其低級駢體之敦煌俗文學及燕山外史式之遊仙窟等、皆世所習見、不復具引。（『元白詩箋證稿』〔1950〕）

後見敦煌發見之變文俗曲殊多三三七句之體、始得其解。關於敦煌發見

問疾品演義跋」（1930）、「敦煌本維摩詰經問疾品演義書後」（1932）、共に陳寅恪（2001f）所收。また「西遊記玄奘弟子故事之演變」（1930）、「薊丘之植植於汶篁之最簡易解釋」（1931）、陳寅恪（2001f）217、297頁参照。

<sup>15</sup> 「三國志曹沖華佗傳與佛教故事」（1930）、陳寅恪（2001a）180頁。

<sup>16</sup> 「武曌與佛教」（1935）、陳寅恪（2001f）163、165-167頁。『札記・舊唐書之部』、同（2001g）35、100頁。『同・沙州文錄補遺附錄之部』、同（2001h）291-292頁。

<sup>17</sup> 以上二種、『札記・沙州文錄補遺附錄之部』、陳寅恪（2001h）292-293頁に見える。

<sup>18</sup> 『札記・舊唐書之部』、陳寅恪（2001g）70頁。『燉煌掇瑣』の利用は第六節も参照。

<sup>19</sup> 『元白詩箋證稿』（1950）、陳寅恪（2001c）263頁、注51参照。

<sup>20</sup> 『隋唐制度淵源略論稿』（1944）。陳寅恪（2001b）171頁では「秦婦吟」にも言及する。

<sup>21</sup> 卞僧慧（2010）132頁から轉引。陳寅恪の文章ではないが、その考えは反映しているよう。

<sup>22</sup> 「韓愈與唐代小説」（1947）を指す。陳寅恪（2002）所收。英文による初出は1936年。

之變文俗曲、詳見敦煌掇瑣及鳴沙餘韻諸書所載、茲不備引。(同、中唐の新樂府と變文の類似を指摘<sup>23</sup>)

(十一) 敦煌石室中之俗文學材料、經文之書尾、紙背所記之帳目或雜記亦有價值。贊普起居注(西藏文<sup>24</sup>)尤有價值。(石泉、李涵「聽寅恪師唐史課筆記一則」<sup>25</sup>)

個別の寫本を挙げず、總體的に俗文學(ここでは變文とほぼ同義)を評した例を示した。佛典・小説・詩歌など他領域の文獻とそれらを結合して考察しようとする態度が、多くに読み取れる。最後の舉例は、學生に對して敦煌史料の價値を説いた文章だ。その啓蒙的な性格にも因るが、陳寅恪の敦煌文獻への關心が狭い領域に限られなかった證左となろう。

#### 四、北平圖書館所藏文獻

陳寅恪にとって、唯一の實見し得る敦煌文獻の大規模なコレクションが、北平(北京、現中國國家)圖書館の收藏品だった。陳垣(1880~1971)に依る目録の序で、彼はいう。

新會陳援庵先生垣、往歲嘗取燉煌所出摩尼教經、以考證宗教史。其書精博、世皆讀之而知矣。今復應中央研究院歷史語言研究所之請、就北平圖書館所藏燉煌寫本八千餘軸、分別部居、稽覈同異、編爲目錄、號曰燉煌劫餘錄。誠治敦煌學者、不可缺之工具也。書既成、命寅恪序之。或曰、燉煌者、吾國學術之傷心史也。其發見之佳品、不流入於異國、即祕藏於私家。茲國有之八千餘軸、蓋當時唾棄之賸餘、精華已去、糟粕空存、則此殘篇故紙、未必實有繫於學術之輕重者在。今日之編斯錄也、不過聊以寄其憤慨之思耳!是說也、寅恪有以知其不然、請舉數例以明之。摩尼教經之外、如八婆羅夷經所載吐蕃乞里提足贊普之詔書、姓氏錄所載貞觀時諸郡著姓等、有關於唐代史事者也。(「陳垣燉煌劫餘錄序」<sup>26</sup>)

北平圖書館所藏の敦煌文獻を質的に輕視する傾向を、陳寅恪は批判する。引用は省くが、この後にも同圖書館の收藏品中で學術研究に供し得る例が列擧される。そもそも、『燉煌劫餘錄』(國立中央研究院歷史語言研究所、1931年)編纂の遂行には、彼自身も關與していた。

<sup>23</sup> 以上、三條はそれぞれ陳寅恪(2001f) 263頁、同(2001c) 3、125頁に見える。

<sup>24</sup> P.T.1288 (IOL Tib J 750と接合)を指すらしい。Jacques Bacot(1940) 9-52頁參照。

<sup>25</sup> 陳寅恪(2002) 493頁。1944年下半期、成都に疎開していた燕京大學での講義資料。

<sup>26</sup> 初出1930年、陳寅恪(2001f)所收。



其所擬辦法、想無不可行、因敦煌組非援庵擔任不可。一因渠現爲此北平圖書館之負責任者；二爲渠已先下過工夫、他人若從事於此、尚須重費與陳前所費過之工夫、太不經濟；三、陳君學問確是可靠、且時時努力求進、非其他國學教員之身(?)以多教鐘點而絕無新發明者同也。(「致傅斯年」九<sup>27</sup>)

陳寅恪と、留學以來の知己で後にその従妹の夫ともなる傅斯年(1896～1950)は各々第一組(歴史組)主任(兼任)、所長として歴史語言研究所(史語所)の成員だった。この書簡で彼は陳垣(字は援庵)になお責任者として、『劫餘録』の編纂を續けさせるよう強く勧める。

京師圖書館(北平圖書館の前身)長を兼ねた頃から陳垣は、敦煌文獻の目録化を始めていた(『劫餘録』巻首の陳垣「敦煌劫餘録序」)。要職にあって多忙を極める彼に、『劫餘録』の完成を望む陳寅恪の態度には、かかる事情の他、そのマニ教研究等への敬服が關わる<sup>28</sup>。

陳寅恪の北平圖書館所藏敦煌文獻利用について、目を引く事例がある。『金光明經冥報傳』の敦煌寫本は、北平圖書館も複数所藏していた。だが、陳寅恪はこの靈驗記を扱う早期の專論(1928)で、国内外の資料を博搜しつつ(注70)、それらに全く觸れるところが無い。

この事實は、陳垣らの整理を経て、初めて北平圖書館の寫本羣を利用する道が開かれたことを示すのではないか。次に「劫餘録序」や許國霖『敦煌石室寫經題記彙編』(菩提學會、1937年)の序<sup>29</sup>以外で、實見に基づき、陳寅恪が言及したであろう敦煌文獻を擧げておく。

月091・BD00791號1:『八婆羅夷經』<sup>30</sup>

騰029・BD03129號:「蓮花色尼出家因縁」<sup>31</sup>、『佛說諸經雜縁喩因由記』<sup>32</sup>

光094・BD05394號:『維摩詰經』「菩薩品」<sup>33</sup>

位079・BD08679號:『貞觀氏族志』<sup>34</sup>

みな「劫餘録序」にも名の擧がる寫本だ。擬題は概ね『劫餘録』に據る。陳垣らの調査と『劫餘録』の編纂が、陳寅恪の敦煌文獻利用に便宜を與えたらうことは

<sup>27</sup>1929年某月31日付の手紙、陳寅恪(2001d)28頁。

<sup>28</sup>陳垣(1980)329-378頁でマニ教經典(宇056・BD00256、S.3969、P.3884)を利用。

<sup>29</sup>「敦煌石室寫經題記彙編序」(1939)、陳寅恪(2001f)。『彙編』にこの「序」は未收。

<sup>30</sup>「吐蕃彝泰贊普名號年代考」(1930)、陳寅恪(2001f)119頁。

<sup>31</sup>「蓮花色尼出家因縁跋」(1932)、陳寅恪(2001a)。

<sup>32</sup>『讀書札記・敦煌零拾之部』、陳寅恪(2001h)306頁。

<sup>33</sup>「敦煌本維摩詰經文殊師利問疾品演義跋」(1930)、陳寅恪(2001f)210頁。

<sup>34</sup>『札記・新唐書之部』、陳寅恪(2001g)462頁。

想像に難くない。

ただ、『劫餘録』に則って、もと「姓氏録」と稱した（「劫餘録序」の引用を参照）BD08679 號を、彼は「貞觀氏族志」と呼び變えている。これは、後の研究<sup>35</sup>に基づくのだろう。札記中の片言隻句ながら、陳寅恪が新説を吸収して見解を變更した例として興味深く思われる。

## 五、『大正新脩大藏經』

大正一切經刊行會に依る『大正新脩大藏經』（以下、大正藏）は正續編一〇〇卷（1924～1934）から成る佛典の大全集だ。周知の如く、その編纂の過程では敦煌文獻も利用された。

夙に、留學中の陳寅恪は商務印書館の景印に係る前田慧雲編『大日本續藏經』（1923～1925）、即ち正續藏の預約券を入手する方途を探っている<sup>36</sup>。早くより、彼が佛典の史料的價値を認識していたことが分かる。大正藏も、早々に利用し始めたかと思われる。

次に大正藏の卷別に陳寅恪が言及した敦煌文獻を列擧する。（ ）内は各卷の刊行年、〔 〕内は各佛典の編號である。大正藏を情報源にしたと明言する場合は、文獻名を太字にした。

第 8 卷（1924）：〔256〕 S.2464 『唐梵翻對字音心經』<sup>37</sup>

第 48 卷（1928）：〔2007〕 S.5475 『壇經』<sup>38</sup>

第 51 卷（1927）：〔2075〕 P.2125・S.516 『歷代法寶記』<sup>39</sup>

第 85 卷（1932）：〔2734〕 村山龍平藏『**金剛暎**』卷上<sup>40</sup>、〔2780〕 S.2497 唐惠淨撰『温室經疏』一卷<sup>41</sup>、〔2810〕『百法明（門）論』<sup>42</sup>、〔2871〕 松本文三郎藏『大通方廣經』<sup>43</sup>、〔2837〕 S.2054 『楞伽師資（血脈）記』<sup>44</sup>、〔2879〕 P.2186・

<sup>35</sup> 向達（1931）60-61 頁がこれに當たろう。ただし、その定名の是非はいま問わない。

<sup>36</sup> 「與妹書」（執筆時期不明）、陳寅恪（2001f）355 頁。初出は『學衡』20（1923）。

<sup>37</sup> 「敦煌本唐梵翻對字音般若波羅蜜多心經跋」（1930）、陳寅恪（2001f）。

<sup>38</sup> 『札記・高僧傳二集之部』、陳寅恪（2001i）242 頁。また注 94 参照。

<sup>39</sup> 「致胡適」七、陳寅恪（2001d）140 頁、『札記・高僧傳二集之部』、同（2001i）211 頁。

<sup>40</sup> 『札記・高僧傳初集之部』、陳寅恪（2001i）29 頁。村山舊藏品は香雪美術館に入る。

<sup>41</sup> 『元白詩箋證稿』（1950）、陳寅恪（2001c）22-23 頁、『札記・高僧傳二集之部』、同（2001i）175 頁。

<sup>42</sup> 『札記・舊唐書之部』、陳寅恪（2001g）71 頁。敦煌寫本は多數存在、編號は省略。

<sup>43</sup> 『札記・敦煌零拾之部』、陳寅恪（2001h）304 頁。松本舊藏寫本は京都國立博物館現藏。

<sup>44</sup> 『札記・韓翰林集之部』、陳寅恪（2001h）206 頁、『同・高僧傳二集之部』、同（2001i）212、215、261 頁。また注 94 参照。

P.2136・S.1552『普賢菩薩證明經』<sup>45</sup>、〔2886〕S.2474『佛爲心王菩薩說投陀經』卷上、〔2901〕S.2021・中村不折藏『佛說法句經』、〔2902〕P.2325『法句經疏』<sup>46</sup>

別巻『昭和法寶總目錄』1（1929）：「敦煌本古逸經論章疏竝古寫經目錄」<sup>47</sup>

第85巻「古逸部 疑似部」を初めとする大正藏利用の跡が見て取れる（最後に附したのは、敦煌出土佛典の目録）。多くは断片的な言及だが、系統的な考察を試みた形跡も傳わる。

自敦煌本壇經、楞伽師資記、歷代法寶記諸書發見後、吾人今日所傳禪宗法統之歷史爲依託偽造、因以證明。其依託偽造雖已證明、而其眞實之史蹟果何如乎？此中國哲學史上之大問題尚未能解決者也。（遺稿「論禪宗與三論宗之關係」<sup>48</sup>）

初期の禪宗史書等が従來の禪宗史を書き換える可能性を示唆した文章だ。もとより、金九經輯『楞伽師資記』（京城金氏北平待曙堂排印本、1931年<sup>49</sup>）、『校刊歷代法寶記』（雞林金氏瀋陽排印薑園叢書本、1935年）など中國で刊行された關連の研究業績もある。前者は大正藏も校勘に用いる。従って、陳寅恪が大正藏所收の禪籍にのみ依據したとはいいい切れない。

ただ、『歷代法寶記』を含め、彼が大正藏で情報を得た佛典が少なくないのも事實だ。最も早くまとまった數の敦煌佛典を世に出した同叢書の陳寅恪への作用は小さくはあるまい。

## 六、日本人の先行業績

大正藏を除く日本人の先行業績を、陳寅恪が敦煌學の研究に利用した例も存する。早くは處女論文でペリオの業績を引く（注6）と共に、日本における研究<sup>50</sup>を参考文献に挙げている。次に掲げるのは言及が一回に止まる日本人の業績だ（「：」の前が論著、後が文獻名）。

ポール・ペリオ、羽田亨共編『燉煌遺書』影印本第一集（東亞攷究會、1926年）：P.2139 法成譯『如來像法滅盡之記』

<sup>45</sup>『札記・高僧傳二集之部』、陳寅恪（2001i）200頁。

<sup>46</sup>以上三種、「敦煌本心王投陀經及法句經跋尾」（1939）、陳寅恪（1948）、各々陳寅恪（2001f）、同（2001c）102-103頁參照。中村舊藏品は書道博物館現藏（【090】）。

<sup>47</sup>「敦煌石室寫經題記彙編序」（1939）、陳寅恪（2001f）228頁。

<sup>48</sup>陳寅恪（2002）431頁。執筆時期は不明ながら、視力低下前という點は確かだ。

<sup>49</sup>更に早くこの前年に日本で刊行された『鳴沙餘韻』（注54）75、76-1に景印が見える。

<sup>50</sup>羽田亨（1958）360-364頁、石濱純太郎（1943）192-197頁。



同活字本第一集（東亞攷究會、1926年）：P.2553「昭君出塞變文」<sup>51</sup>

玉井是博「燉煌戸籍殘簡について」（『東洋學報』16-2、1927年）：P.3354「燉煌郡燉煌縣龍勒鄉都鄉里天寶六載籍」<sup>52</sup>

西本龍山『燉煌出土十誦比丘尼波羅提木叉戒本解説』（十誦戒本刊行會、1929年1月）：大谷大學圖書館餘乙30『十誦比丘尼波羅提木叉』<sup>53</sup>

矢吹慶輝『鳴沙餘韻 敦煌出土未傳古逸佛典開寶』（岩波書店、1930年）第八十二：S.2440a「維摩經押座文」<sup>54</sup>

仁井田陞『唐令拾遺』（東方文化學院東京研究所、1933年）：「巴黎圖書館所藏敦煌寫本唐令」<sup>55</sup>

このうち、「昭君出塞變文」は『敦煌掇瑣』と並べて『燉煌遺書』を典據に擧げる。同じ文獻に關して、中國内外の研究者に依る録文を、陳寅恪が併せ參照した例だ。また、西本の著書と陳の論文とは四箇月しか隔たっておらず、研究成果を及收する早さに驚かされる。

これらの他に、陳寅恪が日本人の敦煌學研究を自身の著作中で巧みに利用した例もある。

巴黎國民圖書館藏敦煌寫本伯希和叁伍伍玖號背面天寶十載丁籍：

康氏 羯師范 者羯 羯師忿 羯槎  
安氏 胡數芬 沙阡  
米氏 褐阡  
石氏 阿祿山 羯槎  
羅氏 阿了黑山 特勲  
何氏 莫賀咄<sup>56</sup>

寅恪案：安祿山事跡上引郭子儀雪安思順疏、謂安祿山本姓康。今敦煌寫本天寶丁籍亦有康、安、石等姓以羯爲稱者（見**歷史與地理雜誌第叁叁編第肆卷天寶十載丁籍**及同書第肆壹編第肆卷天寶四載丁籍）、故安祿山父系之爲羯胡、卽中亞月氏種可無疑矣<sup>57</sup>。

<sup>51</sup>以上二種、『元白詩箋證稿』（1950）、陳寅恪（2001c）197、263頁參照。因みに羅常培は『燉煌遺書』影印本第一集所收のP.3419『藏漢對譯千字文』を題材として『唐五代西北方音』（史語所、1933年）を著す際、陳寅恪の助力を得た。羅常培（2008）338頁參照。

<sup>52</sup>『札記・沙州文錄補遺附錄之部』、陳寅恪（2001h）293頁。玉井論文は玉井是博（1942）に再録。

<sup>53</sup>「敦煌本十誦比丘尼波羅提木叉跋」（1929年5月）、陳寅恪（2001f）。

<sup>54</sup>『札記・敦煌零拾之部』、陳寅恪（2001h）311頁。『鳴沙餘韻』の利用は注23參照。

<sup>55</sup>「致浦江清」、陳寅恪（2001d）167頁。書簡の中で仁井田の先驅的業績を高く評價する。

<sup>56</sup>「唐史講義」、陳寅恪（2002）304頁。1951年の嶺南大學における講義資料。

<sup>57</sup>『唐代政治史述論稿』（1943）、陳寅恪（2001b）215頁。

約二年間、主にパリで敦煌文獻の調査に従事した那波利貞（1890～1970）は歸國（1933）後、唐代の戸籍に關する長大な論文を學術誌に分載する。陳寅恪が用いたのは、その最後の一篇だ<sup>58</sup>。ここで問題とされる文書は、P.3559Vで敦煌縣從化鄉等の住民臺帳である。

那波論文發表の翌年には、作成の時期が天寶十載（751）と比定され、更に次の年には「天寶十載丁籍」と稱されるようになるなど、この文書に對する學界の反響は大きかった<sup>59</sup>。陳寅恪も「天寶十載丁籍」と呼ぶ以上、これら那波より後の研究をも參照していたと見える。

ただ、彼の關心の所在はやや異なる。從化鄉だけで257人の姓名を記すP.3559Vの那波に依る録文から、陳寅恪は非漢人と思しき姓名を持つ者を抽出した。先に引いた「康氏 羯師范」云々という列擧は、（これ自體は後年に作ったメモだが）この結果と考えられる。

その上で、彼は「羯」字を含む名の存在に着目した。同時代史料が安史の亂（755～763）での反軍を「柘羯」、「羯胡」と呼ぶ事實とこの種の姓名を、陳寅恪は併せ考え、首魁・安祿山（本姓は康）の出自は「中亞の月氏種」と斷じたのだ。社會經濟史の面で注目を浴びていたP.3559Vは、かくて民族史における好個の史料としても價値を持つようになる。

陳寅恪の説が公になる前に、この文書から敦煌縣に西域系住民の集住地が存在した事實を指摘する研究が無かったわけではない<sup>60</sup>。ただ、日本人の録文や續く年代比定等を基礎に、傳世の文獻をも使い、獨自の見解を示した點には、彼一流の史料操作を認めるべきだろう。

以下、明記こそしないが、日本の敦煌學研究を利用した可能性がある言及を示しておく。

又巴黎國民圖書館藏敦煌寫本伯希和號第貳伍佰肆唐代祖宗忌日表云：

皇六代祖景皇帝。

皇后梁氏。

五月九日忌。（「三論李唐氏族問題」<sup>61</sup>）

P.2504は唐令の逸文や官職の表を含むことで、早くに知られた文書だが、全體の紹介は大谷勝眞（1885～1941）の調査（1927～1928）を俟たねばならない<sup>62</sup>。當

<sup>58</sup>那波利貞（1934）。掲載誌『歴史と地理』（史學地理學同攷會編、大鏡閣刊、1917～1935）は第34卷第6號で停刊。「第肆壹編第肆卷」云々（前注參照）とは、陳寅恪の誤解か。

<sup>59</sup>鈴木俊（1935）89-93頁、陶希聖（1936）23頁。反響は笠沙雅章（2002）170頁參照。なお王永興（1993）21-44頁等以來、「丁籍」ではなく「差科簿」と考えるのが通説である。

<sup>60</sup>石田幹之助（1973）819-826頁。のち池田温（1965）がこの方面の分析を深めている。

<sup>61</sup>初出1935年、陳寅恪（2001f）348-349頁。

<sup>62</sup>大谷勝眞（1933）。研究の背景は辻正博（2002）159-160頁、上山大峻（1973）參照。

該の文書には唐皇室及びその祖先（皇帝・皇后を含む當主とその夫人）の忌日が列記されている。

引用した箇所では、一代を擧げるのみだが、陳寅恪は他の文章においてもこの P.2504 を取り上げ、李氏數代の祖先が娶った女性の姓に意を拂う<sup>63</sup>。即ち、早期の夫人は梁氏を初め非漢人とは断定できぬ氏族に占められると、彼はいうのだ。従って、漢人以外（獨孤氏等）との通婚は比較的遅い事象であり、李氏は漢族だと結論付けられる。説の當否は措いて、貴重な同時代史料である「唐代祖宗忌日表」の情報を大谷の研究より得た可能性は高い。

寅恪案、黎庶昌廣韻本所載陸氏序文中又有周思言音韻一書、今所見巴黎國民圖書館藏敦煌寫本伯希和號貳仟壹柒貳壹貳玖、倫敦博物院藏敦煌寫本斯坦因號貳仟伍伍切韻殘卷及北平故宮博物院影印唐寫本王仁昫刊謬補缺切韻中之陸序竝無此五字；而王仁昫本韻目下之陸氏原注、亦全未涉及周書、頗疑此爲後人訛增者、又周思言其人、今亦不能確考。（「從史實論切韻」<sup>64</sup>）

陸法言『切韻』の序に見える「周思言音韻」のわずか五字を校勘するため、相當な手間を費やす。使用される敦煌文獻のうち、P.2129 の該當箇所は『敦煌掇瑣』（注 18～20）下輯（史語所、1934 年）に録文を収める。また S.2055 も『唐寫本切韻殘』（用海寧王國維所手摸石印唐鈔本上海重景印、1931 年）中の「切二」（王國維書寫）がそれに当たる<sup>65</sup>。

今一種の P.2017 は神田喜一郎輯『燉煌祕籍留眞』（平安神田氏景印本、1937 年）巻上に収める寫眞が最も早い公刊と思しい。先に擧げた校勘は、この景印によるものではないか。

もちろん、上記の二例に關する記述は推測でしかない。1930 年代の後半には中國人學者が英佛兩國で撮影した敦煌文獻の寫眞を北平圖書館等へ送る事業が既に始まっている<sup>66</sup>。

陳寅恪がそれらより情報を得たという可能性も排せぬ以上、P.2017 等について日本人の業績を参照したと断定することは差し控えたい。ただ、それらを除いても、彼自身が日本人の先行研究を見たと言及する例が少なくない點は、本節で述べたところより明らかだ。

<sup>63</sup>『札記・舊唐書之部』、陳寅恪（2001g）26 頁、『唐代政治史述論稿』（1943）、同（2001b）195-196 頁、「唐史講義」（1951、注 56）、同（2002）219 頁。共に P.2504 の情報源は無い。

<sup>64</sup>初出 1949 年、陳寅恪（2001e）395-396 頁。この前の頁にも同様の校勘が見える。

<sup>65</sup>ペリオから寫眞を入手したため王國維以來、「切二」は長らく佛國所藏文獻と思われていた。高田時雄（2002b）237-239 頁参照。陸志韋（1939）86 頁は正しく S.2055 と稱する。

<sup>66</sup>P.2017 の寫眞もその一つ、袁同禮（1940）611 頁。この事業については第八節参照。

更には、『沙州文録補』に収める英國所藏寫本（注16）が、狩野直喜（1868～1947）の録文に基づくという事実もある。これらや大正藏の例も考え合わせれば、陳寅恪の敦煌學が日本人學者の歐州への調査旅行から直間接的に受けた學恩は大きかったといえよう。

## 七、個人の收藏品

本節では、陳寅恪が目撃した乃至はそれを望んで果たせなかった個人收藏の敦煌文獻に注目したい。次に引用するのは、いずれも胡適（1891～1962）が彼に宛てた書簡の一節だ。

**降魔變文**已袞好、甚盼你能寫一跋。（1931年5月3日付）

前送上請題跋的**降魔變文**、現有日本朋友**長澤**君索觀、可否請 賜還一用。（同年8月29日付<sup>67</sup>）

胡適が敦煌寫本に跋を書いてくれるよう頼んだ件に關する箇所を抜粹した（後の書信は手稿が傳わる）。この依頼は胡・陳兩人の交遊に加え、陳寅恪の令名、その「降魔變文」（彼の所謂「須達起精舍因緣曲」）研究の經驗を買ってのものだろう<sup>68</sup>。なお、陳氏の現存する著作に當該の跋文や寫本實見の記録は見えず、そもそも跋が著されたかも詳らかでない。

ともかく、胡適所藏の敦煌寫本が一時期、陳寅恪の手元にあった點は疑いない。個人藏の敦煌文獻を彼が目にした例は他にもあったようだ。そう推測させる記述を擧げておく。

**合肥張氏藏敦煌寫本金光明經殘卷**卷首有**冥報傳**、載温州治中張居道入冥事。日本人所藏敦煌寫經亦有之。（日文原報告未見、僅見一千九百十一年安南遠東法蘭西學校報告第十一卷第一百七十八及第一百八十六頁所引<sup>69</sup>）予雖未見其原文、以意揣之、當與此無異。（「懺悔滅罪金光明經冥報傳跋」〔1928〕<sup>70</sup>）

寅恪所見敦煌石室卷子佛經注疏、大抵草書<sup>71</sup>。**合肥張氏藏敦煌草書卷**

<sup>67</sup> 各々羅香林（1970）16頁、胡適（1994）44-45頁に見える。「長澤」は當時、訪中していた長澤規矩也を指す。

<sup>68</sup> 胡適舊藏「降魔變文」は黃征（2003）、陳寅恪「須達起精舍因緣曲跋」は注14参照。

<sup>69</sup> Noël Peri（1911）。ただしそこに引く松本文三郎（1914）169-172頁の記述は北平圖書館藏『金光明經』の寫眞に基づく分析で、「日本人所藏敦煌寫經」というのは陳寅恪の誤讀。

<sup>70</sup> 以下三條、陳寅恪（2001f）290、186、198-199頁。

<sup>71</sup> 『札記・舊唐書之部』、陳寅恪（2001g）335頁にも「今敦煌寫本佛經正文俱眞書、注疏乃有草書者、殆亦敬與不敬之別」とある。



子三種、皆佛經注疏、其一即此書、惜未取以相校。（「大乘義章書後」〔1930〕）

寅恪所見敦煌本中文金光明經冥報傳（合肥張氏所藏）西夏文之譯本（北平圖書館藏）及畏兀吾文譯本（俄國科學院佛教叢書第壹柒種）、皆取以冠於本經之首。（「敦煌本唐梵翻對字音般若波羅蜜多心經跋」〔1930〕）

「合肥張氏」は安徽合肥の人・張廣建（1867～?<sup>72</sup>）を指す。軍人として袁世凱の配下で榮達した彼は、民國初期に甘肅で兵馬の權を握る（1914～1920）。この間、地元で流出していた敦煌文獻を入手したという。その一部は、民國十三年（1924）秋の「甲子年江西救濟書畫古物展覽會」に出陳された<sup>73</sup>。張氏所藏の敦煌寫經は多くが日本の北三井家に賣却され（1928）、三井文庫別館が現に藏する<sup>74</sup>。「合肥張氏（所）藏」の敦煌本とは、それを指す。

『金光明經』（現收藏番號 025-010-050）と『大乘義章』（同 025-010-054）は書名を記すので、問題無い。後者を除く残る「佛經注疏」二種は『淨名經集解關中疏』（同 025-010-039）及び『草書法華玄贊』（同 025-014-014）と思しい。戦前の目録に「（又）草字」と三點竝ぶのが<sup>75</sup>、この「草書卷子三種」か。他に、個人藏敦煌本に觸れる書簡（1928年10月）もある。

近聞趙萬里言、見敦煌卷子有抱朴子、并聞李木齋亦藏有敦煌卷子甚佳者、祕不示人。趙萬里現編一目録、專搜求關於敦煌著述、如能成書、當可供參考。（「致傅斯年」三<sup>76</sup>）

民國十七年（1928）、陳寅恪は李盛鐸（號は木齋）が所藏する明清檔案を購入すべく、史語所を代表し、傅斯年（第四節参照）と連繫して交渉を進めていた<sup>77</sup>。陳・李の兩人は前者の父（陳三立）と後者が「摯友」という間柄（共に江西籍で1889年の進士）だった<sup>78</sup>。

陳寅恪が李盛鐸との折衝に当たった背景には、このような所縁も存したかと思われる。ここでは傳聞情報を傅斯年に示すだけだが、彼自身、李氏所藏本に關心は抱き續けていた。

<sup>72</sup>富田淳（2003）による。王學莊（1986）296頁は1864年出生、1938年2月没とする。

<sup>73</sup>收藏家編集部（1994）はその目録。ただしこの展覽會當時、陳寅恪はまだ留學中だった。

<sup>74</sup>赤尾榮慶（2003）参照。同書の目録では陳寅恪言及の寫本は全て〈存疑〉扱いとされる。

<sup>75</sup>赤尾榮慶（2003）に寫眞を載せる『北三井家所藏敦煌發掘古寫經目録』『六朝及唐人寫經特別品』條の冒頭参照。陳寅恪が張氏藏品を見た経緯は未詳、榮新江（1996）213-214頁。

<sup>76</sup>陳寅恪（2001d）20頁。文中の「敦煌卷子」「抱朴子」は兩斷されて日本に渡り、一部は書道博物館現藏（【132】）、残りは關東大震災で燒失。中村不折（1927）卷下29葉参照。

<sup>77</sup>交渉の顛末は「致傅斯年」三～八、陳寅恪（2001d）19-27頁、岳南（2008）112-121頁参照。李盛鐸の檔案所藏を陳寅恪は早くから知っていたらしい。陳守實（1984）423頁。

<sup>78</sup>「寒柳堂記夢未定稿（六）戊戌政變與先祖先君之關係」、陳寅恪（2001a）203頁。



今敦煌本之十六國春秋殘卷惜未得見、不知與此有關否<sup>79</sup>？

唐皇室が西涼（五胡十六國の一）の君主・隴西李氏の後裔を自稱したことは、よく知られる。陳寅恪は諸資料を用いてそれを否定するが、引用箇所はその文脈の中に見える。

「敦煌本之十六國春秋」とは、「李木齋氏鑒藏燉煌寫本目錄」（北京大學圖書館善本部現藏）に「卅八 十六國春秋 後錄駢文」、「七二 十六國春秋 背道家疏」とあるのを指す<sup>80</sup>。目睹し得ぬにせよ、陳寅恪が李盛鐸所藏敦煌寫本の内容を把握していた證據だ。

実際には羽 038、羽 072 ノ a として財團法人武田科學振興財團杏雨書屋が藏する兩寫本は殘片（後燕の記事を載せる）で、『十六國春秋』という擬題にも根據は乏しい<sup>81</sup>。西涼李氏の史實がそこに見える事態をも想定する陳寅恪の配慮は、結果として杞憂に終わった。

ただ、實態不明の文獻でも萬一の可能性を慮って掲げるその態度には、陳寅恪の博搜癖・周到さと同時に、學者としての良心を汲み取るべきかもしれない。憶測を逞しくすれば、家系的な縁故で他者以上に李盛鐸を熟知する彼は、李氏所藏敦煌寫本にも知るところが多く、また閱覽に向けた行動を取っていたのかもしれない。もちろん、假にそうだったにせよ、「已に日人に售（う）ら」（注 91）と歎じるとおり、結果は不首尾に終わったはずだ。

本節では個人藏敦煌寫本と陳寅恪との繋がりに若干觸れてみた。今日では、かくも貴重な資料の個人所藏自體が想像し難い過去の事象となっている。ただ、二〇世紀前半の敦煌學研究史を語る上で、かかる非公開文獻と個別研究者との接觸は避けて通れぬ事柄だろう。目睹し得たか否かを問わず、陳寅恪と上記三氏收藏品との關係もその例外ではあるまい。

## 八、中國人の寫本撮影事業

1930 年代半ばになると、中國人研究者が歐州へ赴き、敦煌文獻の大量撮影を伴う調査に従事し始める。中でも、王重民（1903～1975）の業績は大きかったといえよう。彼の成果から陳寅恪が情報を得たであろう敦煌寫本を、まず三種掲げる（呼稱は王氏に依據）。

<sup>79</sup> 『唐代政治史述論稿』（1943）、陳寅恪（2001b）194 頁。

<sup>80</sup> 榮新江（1999）117、119 頁。中央圖書館（1935）50 頁にも同じ記述が見える。

<sup>81</sup> 岩本篤志（2004）、同（2010）に詳しい。なお原本『十六國春秋』は逸して傳わらない。

P.2682 『白澤精話圖』<sup>82</sup>

P.2492 『白香山詩集』<sup>83</sup>

P.4093 唐劉鄴撰 『甘棠集』<sup>84</sup>

後二者は王重民『巴黎敦煌殘卷敘錄』第二輯（國立北平圖書館、1941年）卷四、残る一種は同第一輯（同、1936年）卷三に著録する<sup>85</sup>。陳寅恪がP.2492をP.5542と誤り<sup>86</sup>、P.4093について「之を訪うを俟つ」（注84）という事実を思えば、同じ誤謬が見え、また解説のみで録文を缺く『敘錄』に據る點は、ほぼ疑いない。王氏の名を明記した、陳氏論文もある。

寅恪案、此事最爲可疑、以今日敦煌寫本之多、（除翟君所舉五本外、王重民君近影得巴黎圖書館伯希和號叁柒捌拾及叁玖伍叁兩本、故寅恪間接直接所得見者、共有七本。德化李氏尚藏一本、已售於日人、未得見、不知與所見之七本異同如何？）當時必已盛傳、足徵葆光子時人號爲‘秦婦吟秀才’之言爲不妄。（「讀秦婦吟」）

孫光憲（號は葆光子）『北夢瑣言』卷六「以歌詞自娛」に據ると、唐末の韋莊は長篇詩「秦婦吟」を以て、世に「秦婦吟秀才」の名を得たという。この夙に亡びた幻の名作は複数の敦煌寫本が発見されるという劇的な形で再登場し、少なからぬ學者が研究に攜わる。

狩野直喜、羅振玉（1866～1940）、王國維、ジャイルズ（Lionel Giles、翟理斯、1875～1958）はその代表格だった。民國十七年（1928）より俞平伯（1899～1990）の揮毫に係る「秦婦吟」を居室の壁に貼っていた陳寅恪もこれに續き、ここに引く專論<sup>87</sup>を著すに至った。

「讀秦婦吟」は民國二十五年（1936）、即ち王重民の敦煌寫本撮影事業が續く頃に發表される。その時點で、王氏が見出した「兩本」を含む「七本」を、陳寅恪は既に参照していた<sup>88</sup>。

實は敦煌文獻の大量撮影を企圖した北平圖書館は、經費を賄うべく清華大學を共同出資者に選んでいた。同圖書館は民國二十四年（1935）の二月乃至四月頃に、清華大教授の陳寅恪から撮影希望寫本のリストを受け取る。かくて清華大も、こ

<sup>82</sup> 『札記・舊唐書之部』、陳寅恪（2001g）91頁。なお、「白澤精怪圖」に作るのが正しい。

<sup>83</sup> 『元白詩箋證稿』（1950）、陳寅恪（2001c）167、178、180、251頁。

<sup>84</sup> 『札記・新唐書之部』、陳寅恪（2001g）576頁に「近敦煌有鄴集、俟訪之」とある。

<sup>85</sup> ここに挙げた各寫本に關する敘錄の初出は王重民（1939）13頁、同（1935）、同（1937）。

<sup>86</sup> 近年に至っても、この誤りは少なからず踏襲されている。徐俊（2000）27-28頁參照。

<sup>87</sup> 陳寅恪（1936）957頁。『札記・舊唐書之部』、『同・新唐書之部』、同（2001g）162、579頁にも言及あり。また注20參照。羅振玉らの研究は顏廷亮・趙以武（1990）に網羅される。

<sup>88</sup> P.3780とP.3953は袁同禮（1940）622頁に見えるので、北平に寫眞は届いていたろう。

の事業で得られた寫眞を藏したわけだ（後に日中戦争で損壊）。以上の経緯は、中國國家圖書館の檔案より知られる<sup>89</sup>。

従って、王重民がパリから北平に送る寫眞を逸早く利用できる立場に陳寅恪はいたと見える。「秦婦吟」の他、彼がそこから情報を得たと思しき寫本に P.2640「常何碑」がある<sup>90</sup>。

「讀秦婦吟」は更に李盛鐸（江西德化の人）舊藏本（杏雨書屋現藏、羽 057<sup>91</sup>）にも言及する。中國内外の先行研究、現に進みつつある中國人の實見調査に加え、目睹できぬ個人の收藏品への目配りも忘れない。「秦婦吟」が長く關心の對象だった<sup>92</sup>ためもあるが、あらゆる情報を博搜して止まぬ彼の「敦煌學」の特徴が、ここに最もよく表れている。

小論では、情報の入手に関わる人的なネットワーク（個人間での敦煌寫本の寫眞や録文の遣り取り）は、ほぼ無視してしまった。しかし、當時の研究者相互における情報交換の解明は、現時点では至難な業だ。新資料の登場を期待しつつ、これは今後の課題としたい。

ただ、内容の公開が偶然性（初期の研究者の興味等）に左右される中、敦煌文獻の情報を得るべく、陳寅恪が如何に努力したか、その一端は小論よりもある程度は明らかだ。獲得した知識を並行して驅使しながら、新たに利用可能となった資料を取り込み、自身の見解を更新してゆく。本節で見た「秦婦吟」の場合を典型に、この種の例は乏しくない。

學術研究の常道とはいえ、これは内外の論著を十分に把握して初めて、可能となることだ。この各論著の中でも、第五・第六兩節で見た日本人の業績への依據は目を引く。

これは、この時期の日本が敦煌學「最先進國」だった以上、奇異でもあるまい。また、陳寅恪にとって最初の外國體驗は日本への留學（1902年2月～1905年末、一時歸國を挟む）だった。ただ、日本の學術研究に對して、彼には思うところも

<sup>89</sup>劉波・林世田（2010）。陳寅恪の「應照清單」（寫本リスト）提示はその114頁参照。

<sup>90</sup>常何は唐初の人。『札記・舊唐書之部』、『同・新唐書之部』、『隋唐制度淵源略論稿』（1944）、『唐代政治史述論稿』（1943）、「唐史講義」（1951）、「論隋末唐初所謂「山東豪傑」（1952）、陳寅恪（2001g）105-106、114、363、435、628頁、同（2001b）70-71、241頁、同（2002）250-251頁、同（2001e）248-249、252-253頁参照。夙に同碑文の寫しを持つ者（姜亮夫等）はいた。姜亮夫（2002）41頁参照。ただ1937年6月18日付王重民の袁同禮宛書簡に據れば P.2640 は撮影済みで、陳寅恪の情報源はそちらか。劉波・林世田（2010）118頁。

<sup>91</sup>李氏所藏本の目録（注80）に著録。榮新江（1999）118頁、中央圖書館（1935）50頁。なお、「已售於日人」という以上、「讀秦婦吟」の發表年（1936）から見て陳寅恪は李盛鐸所藏本の賣却（同年2月以降）を時間差無しに知っていたようだ。高田時雄（2004）21頁。

<sup>92</sup>「讀秦婦吟」は後續の研究も参照し最終的に「韋莊秦婦吟校箋」となる。陳寅恪（2001a）。

あった<sup>93</sup>。小論で（推測も含めて）示したその盛んな利用は、彼の對日本觀を明らかにする一助となり得ようか。

陳寅恪の「敦煌學」を扱う従前の論文は、彼の着想の卓拔さ、視野の廣さに賛辭を惜しまない。その賞賛に對しては、大方に異論はあるまい。しかし、それらは實際の研究以前の問題、即ち今日では想像の容易でない情報入手の困難を、ほぼ捨象してしまっている。

自明とはいえ、早期敦煌學の實態を認識するために、これは無視し得ない問題だろう。陳寅恪の資料利用経路は、その貴重な手掛かりとなる。この點で論文の主題、論述の傍證から讀書札記での提起まで、全ての言及を一様に扱う小論の手法も無意味ではないと思う。

## 九、おわりに

歐州留學から歸國後、約十年間は當時の中國國內で最も恵まれた學術的環境（最終的な地位は清華大學教授・史語所第一組主任等）に、陳寅恪は身を置いていた。個人の資質に加え、この環境無くしては、小論で述べ來た彼の「敦煌學」研究は實現しなかつただろう。しかし、その幸福な日々も、民國二十六年（1937）七月の盧溝橋事件で暗轉する。

日中戦争の激化を受けて、陳寅恪は家族と共に北平を脱出し、各地の大學で教鞭を執る流轉の生活を始める。彼が兩眼の視力をほぼ失ったのは、この間のことだ。終戦後、北平に戻るが（1946）、國共内戦でまた南へ逃れて（1948）、廣州の嶺南大學（のち中山大學に合併）教授に就任する（1949）。同年の新中国建國以降も、その地で研究と教育を續ける。

視力喪失後、幾人かの若手研究者の後を承けて、口述筆記等で彼の著述を支えたのは、妻唐筭（1898～1969）と助教黃萱（1910～2001）だった。獻身的だが、元來は家庭の女性で専門の研究者でない彼女たちには史料、殊に新出のそれでは検索を代行するにも限界があつたろう。更に、北京を離れて敦煌文獻やその寫眞利用の便宜を失ったこと、明清史の研究に相當な精力を注ぎ始めたことが、結果的に陳寅恪を「敦煌學」から引き離す。

現に廣州へ遷って後の、敦煌寫本に關わる論著は、概ね舊稿（未發表分を含む）の補正に止まる。ただ、陳寅恪の「敦煌學」への關心は必ずしも消滅したわけではない。小論を終えるに際して、二つの史料を紹介しておく。まず、1957年2月6日付の文章を擧げる。

<sup>93</sup>池田温（1989）、井上進（1998）10-14頁参照。



弟昔年曾作**禪宗傳法偈一文**<sup>94</sup>、引及續高僧傳**遁倫傳**。後知有友人在倫敦鈔出**遁倫語錄**、載入其私人日記中、未發表。今請我兄在此顯微影片中一查。又**唐玄奘詩**、亦見過。（當是偽作。）便中請并鈔示爲荷。

**倫敦印度部藏有西藏文卷子**、其有關歷史者、已陸續在法國亞細亞學報發表。但尚有可貴材料、如能照**中文卷子例**、求得一全部顯微影片、則大妙矣。先請 兄一問科學院圖書館負責同志、不知用何種手續、可以辦到?如事勢簡便、則擬建議有關當局也。（「致劉銘恕」<sup>95</sup>）

當時、中國科學院で商務印書館編『敦煌遺書總目索引』（商務印書館、1962年）の「斯坦因劫經錄」編纂を進めていた劉銘恕（1911～2000）に宛てた陳寅恪の書信だ。「友人」とは誰か不明だが、その「日記」が記す「遁倫語錄」や「唐玄奘詩」といった敦煌文獻中の資料に言及する<sup>96</sup>。

今一つ、この手紙は英國政府の「倫敦印度部」（India Office）所藏の敦煌出土チベット語文獻に觸れる<sup>97</sup>。ここで、陳寅恪は「中文卷子」同様に、「西藏文卷子」のマイクロフィルムも中國へ將來することを劉銘恕に提案している。その五年後、彼はまたこうも述べる。

……談到英國、云人只知英國博物館的敦煌莫高窟的漢簡、而不知奧里斯坦（Aurel Stein）、初發現莫高窟時、取了許〔多〕**西藏文的稿件**、對於唐和吐蕃史料尤可寶貴。其初存於印度政府機關（Indian Office）、現不知在何處、曾函科學院圖書館、但迄無回信。我允回京後爲之一查<sup>98</sup>。  
（「……」、「Indian」は原文のママ）

1962年2月14日、中國科學院副院長の竺可楨（1890～1974）は中山大學を訪問した。ここに引いたのは、当日の日記で、彼が舊交を温めた陳寅恪の發言が記録されている。

國外との通信手段を有さぬ當時の陳寅恪には、「西藏文的稿件」の現状を知る由も無い。科學院への問い合わせも梨の礫に終わったため、竺可楨に對して直談判する形となった。

<sup>94</sup>「禪宗六祖傳法偈之分析」（1932）を指す。この論文は、敦煌本『壇經』、『楞伽師資記』をも利用する。陳寅恪（2001f）187、190頁。

<sup>95</sup>劉銘恕（1957）獻呈への返書、陳寅恪（2001d）279頁。劉銘恕（1988）参照。

<sup>96</sup>注94所掲論文で陳寅恪が用いたのは「遁倫傳」ではなく「曇倫傳」。姜伯勤（2009）123頁。曇倫（遁倫とは別人）は一名臥倫、英藏敦煌文獻ではS.1494、S.5657b、S.6631Vdに登場。同じく「玄奘詩」（「大唐三藏」とあるのが玄奘を指すかは未詳）はS.373Vに見える。

<sup>97</sup>この種の文書や關連の研究にも、陳寅恪は目を通していたようだ。『札記・新唐書之部』に「敦煌石室頗多此贊普時遺文。此贊普即彝泰贊普也」とある。陳寅恪（2001g）623頁。

<sup>98</sup>竺可楨（1989）590頁。竺可楨と陳寅恪は復旦公學の同期（1909）卒業。



英藏敦煌資料中のチベット語文獻に對する陳寅恪の拘りは、個人の研究に限られたものではあるまい。その複製品が後進の中國人研究者を如何に裨益するか考慮したためだろう。老年に至ってなお衰えぬ知的好奇心や敦煌學研究發展への情熱が、ここから看取される。

チベット語資料の確認や複製の實現に、陳寅恪が更に動くことは無かった。それが老病や歩行不能に陥る（1962年7月の右大腿骨骨折により右足の機能を無くす）などの個人的事情に加えて、當時の社會情勢の然らしめるものだった事實<sup>99</sup>は、周知のとおりである。

## 参考文献一覧

（著者名等の後の括弧で括った數字はその論著の發表・出版年を意味する）

### 【日本語によるもの】

赤尾榮慶（2003）：赤尾榮慶研究代表『敦煌寫本の書誌に關する調査研究——三井文庫所藏本を中心として』（文部科學省科學研究費補助金研究成果報告書）

池田温（1965）：「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」、『ユーラシア文化研究』1

池田温（2003）：『敦煌文書の世界』（名著刊行會）、小論關連部分は「敦煌學と日本人」として『日本學』13（1989年）に初出。

石田幹之助（1973）：『東亞文化史叢考』（東洋文庫）、小論關連部分は「天寶十載の丁籍に見ゆる敦煌地方の西域系住民に就いて」として加藤博士還曆記念論文集刊行會編『加藤博士還曆記念東洋史集說』（富山房、1941年）に初出。

石濱純太郎（1943）：『支那學論攷』（全國書房）、小論關連部分は「法成について」として『支那學』3-5（1923年）に初出。

井上進（1998）：「陳寅恪のことなど」、『颯風』34

岩本篤志（2004）：「羽田記念館所藏「西域出土文獻寫眞」766・767『十六國春秋』考——李盛鐸舊藏敦煌文獻をめぐって」、『西北出土文獻研究』創刊號

岩本篤志（2010）：「敦煌本「霸史」再考——杏雨書屋藏・敦煌祕笈『十六國春秋』斷片考」、『資料學研究』7

上山大峻（1973）：「故大谷勝眞氏の敦煌寫本調査ノート」、『人文』6

大谷勝眞（1933）：「敦煌遺文所見錄（一）——唐代國忌諸令式職官表に就いて」、『青丘學叢』13

<sup>99</sup>反右派鬭爭（1957）から文革での迫害死に至る陳寅恪の晩年は陸鍵東（1995）に詳しい。

- 鈴木俊（1935）：「唐代丁中制の研究」、『史學雜誌』46-9
- 玉井是博（1942）：『支那社會經濟史研究』（岩波書店）
- 高田時雄（2002a）：高田時雄編『草創期の敦煌學』（知泉書館）
- 高田時雄（2002b）：「敦煌韻書の發見とその意義」、高田時雄（2002a）所收。
- 高田時雄（2004）：「明治四十三年（1910）京都文科大学清國派遣員北京訪書始末」、  
『敦煌吐魯番研究』7
- 笠沙雅章（2002）：「那波利貞先生の敦煌文書研究」、高田時雄（2002a）所收。
- 趙和平（2002）：趙和平（高田時雄譯）「陳寅恪先生と敦煌學」、高田時雄（2002a）  
所收。
- 辻正博（2002）：「草創期の敦煌學と日本の唐代法制史研究」、高田時雄（2002a）  
所收。
- 富田淳（2003）：「張廣建について」、赤尾榮慶（2003）所收。
- 中村不折（1927）：『禹域出土墨寶書法源流考』（西東書房）
- 那波利貞（1934）：「正史に記載されたる大唐天寶時代の戸數と口數の關係に就き  
て（下ノ下）」、『歴史と地理』33-4
- 羽田亨（1958）：『羽田博士史學論文集 下卷 言語・宗教篇』（東洋史研究會）、  
小論關連部分は「書後」として『支那學』3-5（1922年）に初出。
- 松本文三郎（1914）：『佛典の研究』（丙午出版社）、小論關連部分は「燉煌石室古  
寫經の研究」として『藝文』2-5（1911年）に初出。

#### 【外國語によるもの】

- 池田温（1989）：「陳寅恪先生和日本」、紀念陳寅恪教授國際學術討論會祕書組（1989）  
所收。
- 英藏敦煌文獻（1990）：中國社會科學院歷史研究所、中國敦煌吐魯番學會敦煌古  
文獻編輯委員會、英國國家圖書館、倫敦大學亞非學院『英藏敦煌文獻（漢文  
佛經以外部份）』1（四川人民出版社）
- 榮新江（1996）：『海外敦煌吐魯番文獻知見錄』（江西人民出版社）
- 榮新江（1999）：『鳴沙集——敦煌學學術史和方法論的探討』（新文豐出版）、小論  
關連部分は「李盛鐸藏敦煌寫卷的眞與偽」として『敦煌學輯刊』1997-2（1997  
年）に初出。
- 袁同禮（1940）：「國立北平圖書館現藏海外敦煌遺籍總目」、『北平圖書館圖書季刊』  
新 2-4

- 王永興（1993）：『陳門問學叢稿』（江西人民出版社）、小論關連部分は「敦煌唐代差科簿考釋」として『歷史研究』1957-12（1957年）に初出。
- 王學莊（1986）：「十種辭書工具書民國人物生卒訂補」、『近代史研究』1986-3
- 王重民（1935）、同（1937）：「巴黎敦煌殘卷敘錄」（七）、同（二七）、『大公報』「圖書副刊」87、171
- 王重民（1939）：「巴黎倫敦所藏敦煌殘卷敘錄十二篇」、『圖書季刊』新1-1
- 王川（2004）：「陳寅恪與伯希和的學術交往述論」、『中山大學學報（社會科學版）』2004-5
- 岳南（2008）：『陳寅恪與傅斯年』（陝西師範大學出版社）
- 顏廷亮・趙以武（1990）：顏廷亮、趙以武輯『《秦婦吟》研究彙錄』（上海古籍出版社）
- 紀念陳寅恪教授國際學術討論會祕書組（1989）：紀念陳寅恪教授國際學術討論會祕書組編『紀念陳寅恪教授國際學術討論會文集』（中山大學出版社）
- 姜伯勤（1988）：「陳寅恪先生與敦煌學」、『廣東社會科學』1988-2
- 姜伯勤（2009）：「論陳寅恪先生“新方法”、“新材料”之史學“試驗”——陳寅恪先生《書信集・致劉銘恕》解析」、『史學月刊』2009-5
- 姜亮夫（2002）：『姜亮夫全集』13（雲南人民出版社）、小論關連部分は「海外敦煌卷子知見錄」として『敦煌學論文集』上（上海古籍出版社、1987年）に初出。
- 胡適（1994）：胡適著、耿雲志主編『胡適遺稿及祕藏書信』20（黃山書社）
- 黃征（2003）：「胡適舊藏《降魔變文》真跡舊證」、『敦煌學』24
- 竺可楨（1989）：『竺可楨日記IV（1957-1965）』（科學出版社）
- 周一良（1998）：『周一良集』3（遼寧教育出版社）、小論關連部分は「何謂“敦煌學”」として『文史知識』1985-10（1985年）に初出。
- 收藏家編輯部（1994）：「甲子年江西賑災書畫古物展覽目錄」、『收藏家』1994-1
- 徐俊（2000）：『敦煌詩集殘卷輯考』（中華書局）
- 向達（1931）：「敦煌叢抄」、『國立北平圖書館館刊』5-6
- 桑兵（1997）：「伯希和與中國學術界」、『歷史研究』1997-5
- 中央圖書館（1935）：「德化李氏敦煌寫本目錄」、『中央時事周報』「學瓠」4-48
- 張求會（2004）：「陳寅恪佚文《敦煌本〈太公家教〉書後》考釋」、『歷史研究』2004-4

- 張求會（2005）：「陳寅恪講義《敦煌小說選讀》相關問題續探」、《九州學林》3-4
- 張弘·伊波（1994）、同（1995）：張弘·伊波編「陳寅恪敦煌學論著目錄初編」、同編「同（下）」、《甘肅社會科學》1994-6、1995-1
- 陳寅恪（1936）：「讀秦婦吟」、《清華學報》11-4
- 陳寅恪（1948）：「元微之悼亡詩及豔詩箋證」、《國立中央研究院歷史語言研究所集刊》20上
- 陳寅恪（2001a）：《寒柳堂集》（生活·讀書·新知三聯書店）
- 陳寅恪（2001b）：《隋唐制度淵源略論稿 唐代政治史述論稿》（同上）
- 陳寅恪（2001c）：《元白詩箋證稿》（同上）
- 陳寅恪（2001d）：《書信集》（同上）
- 陳寅恪（2001e）：《金明館叢稿初編》（同上）
- 陳寅恪（2001f）：《金明館叢稿二編》（同上）
- 陳寅恪（2001g）：《讀書札記一集》（同上）
- 陳寅恪（2001h）：《讀書札記二集》（同上）
- 陳寅恪（2001i）：《讀書札記三集》（同上）
- 陳寅恪（2002）：《講義及雜稿》（同上）
- 陳垣（1980）：《陳垣學術論文集》第一集（中華書局）、小論關連部分是「摩尼教入中國考」として『國學季刊』1-2（1923年）に初出。
- 陳紅彥·林世田（2007）：「敦煌遺書近現代鑑藏印章輯述（上）」、《文獻》2007-2
- 陳守實（1984）：「學術日錄 [選載] 記梁啓超、陳寅恪諸師事」、《中華文化研究集刊》1
- 陶希聖（1936）：「唐代戶籍簿叢殘」、《食貨半月刊》4-5
- 卞僧慧（2010）：卞僧慧纂、卞學洛整理《陳寅恪先生年譜長編（初稿）》（中華書局）
- 羅香林（1970）：「回憶陳寅恪師」、《傳記文學》17-4
- 羅常培（2008）：《羅常培文集》10（山東教育出版社）、小論關連部分是羅常培（王輔世記錄）「我是如何走上研究語言學之路的？」として『羅常培紀念論文集』（商務印書館、1984年）に初出。
- 李玉梅（1997）：《陳寅恪之史學》（三聯書店香港）

- 陸慶夫・齊陳駿（1989）：「陳寅恪先生與敦煌學」、紀念陳寅恪教授國際學術討論會祕書組（1989）所收。
- 陸鍵東（1995）：『陳寅恪的最後貳拾年』（生活・讀書・新知三聯書店）
- 陸志韋（1939）：「唐五代韻書跋」、『燕京學報』26
- 劉波・林世田（2010）：「國立北平圖書館拍攝及影印出版敦煌遺書史事鉤沈」、『敦煌研究』2010-1
- 劉銘恕（1957）：「英國博物院所藏的敦煌卷子」、『中國科學院圖書館通訊』1957-1
- 劉銘恕（1988）：「憶陳寅恪先生」、『敦煌語言文學研究通訊』1988-1
- Jacques Bacot（1940）：Jacques Bacot, Frederick William Thomas, Gustave-Charles Toussaint, *Documents de Touen-Houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1940-1946.
- Lionel Giles（1915）：A census of Tun-huang, *T'oung pao*. Sér.2. Vol.16.
- Paul Pelliot（1914）：Notes à propos d'un catalogue du Kanjur, *Journal Asiatique*. Série 11, Tome 4.
- Nöel Peri（1911）：Une mission archéologique japonaise en Chine, *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*. Tome 11.

（作者はハンブルグ大學アジア・アフリカ研究所研究員）